工ト3T-83
40-118
No 1728/XXV

今泉定介校閲
上田亂比古標註

訂正標註方文記

東京　誠之堂

開題および著者鴨の長明の小傳

長明、菊太夫(一に南太夫に作る)と稱し、其の家は、代々山城の國下鴨の氏人にて、祖父季綱、父長綱、みな爾宜なりき。長明、幼より父方の祖母に養はれて、宮中に仕へ奉り、二條天皇の應保の頃、從五位に叙せられぬ。源の俊頼、僧の惠慶等を師として、和歌の道は更なり、琴瑟の秘曲をさへに極めたりき。後鳥羽上皇、つねに其の才學を愛して、藤原の清範、藤原の秀能等と、共に和歌所の寄人にあげ給ひぬ。然れども、長明は、父祖に襲ぎて、社司とならんことを奏請せしに、許されざりしかば、これより快々として樂しまず、寄人をも辞して退去せり。上皇、これをとしみ給ひて、再寄人に補せんの勅ありしを

をづみにき今さら和歌の浦波によせばやよらんあまの捨舟

の詠を献り、また仕へ奉らず、落飾して名を蓮胤と改め、洛外大原山に遁れたりき

いづくより人は入りけんまくず原秋風ふきし道よりぞこし

と詠せしも、おのれの素志、達せずして、世をいとひし比、いやく隠遁せる人のもとへ贈れる歌ありといふ。これより遠く東南北越の勝を探り、又、唯識、止觀の旨と學

び、老荘の道をさへ究めたり。建永、承元の間、幽居を日野の外山に移し、方丈の庵を結びて、志を養ひ、其の終を全くせり。僧心敬の、さゝめごとの記よ、長明が石の床にゝ、後鳥羽上皇、二度御幸ありきとしるせり。其の御寵愛のほどおしはかりぬべし、又、長明、建暦元年鎌倉に遊びし時にゝ、將軍實朝、もとより其の名を聞きしかば、屢、これと延見せり

草も木もなびきし秋の霜きえてむなしき苔をはらふ山風

といふゝ、鎌倉の法華堂にて、念誦讀經の時に、みづから其の堂柱にしるせる歌なりといふ。はじめ俊成の千載集を撰びし時、長明の歌わづかに一首をとりしに、長明ゝ、なほ、大に喜びたりしが、後に新古今集の撰あるに當たり、世人ゝ爭ひて歌を上り、其の多きゝ、一人にして、千百首なるもありき。されど、撰者に刪去せられしもの多かりしに、長明ゝ、唯、十二首を上りて、悉く採錄せられしかば、世に之を美談とせり

長明の事迹ゝ、十訓抄、東齋隨筆、隱逸傳等に見えたり。然れども、その生死の年月を記さず。或説に、久壽元年に生れ、建保四年に寂せりといふ。この説によれば、年をう

くること六十三、長明の著書ゝ、この外に、無名抄、玉集、發心集、四季物語、文字鑰等の數種あり

此の書を方丈記と名づけたるゝ、方一丈の草庵を造れる由來を書ければなり。方丈といふ名の起こりゝ、祖、庭事苑六の卷に、今以禪林正寢、爲方丈、蓋、取則毘耶黎城維摩之室云々とある如く、天竺に、釋迦在世の時、維摩詰といふもの、毘耶黎城の中にて、つねに一丈四方の室に入り、かりに病にふして、訪ひ來るものを説法得度したるよしの故事に因れるなり

さて長明の著書、前にえるせるが中に、無名抄ゝ、大原へ遁れし比の作なるべく、四季物語、發心集ゝ、外山閑居の後の書なるべし。この記ゝ、おもふに、鎌倉へ下りし翌年、即、建暦二年、外山の草庵にて、記されたるものならん。果して然らば、一生著述の絶筆にして、此の後の筆作あるべからず。其の詞の古雅に過ぎず、佶屈に陷らず、平坦にして、意暢び、情至りて、義切なるゝ、容易に他人の摸しがたき所なるべし。これ其の文才の天縱なるのみならず、蓋、學殖きわめて深く、言語文辞に富み、また、思想の豊なりしがためあるべし。錦心繡腸、咳唾も珠をあすといいんも、溢言にはあら

じ。まことに、この文い、徒然草と伯仲し、枕の草子に亞ぐものとやいはまし。又、其の山水風月を侶として、世を厭ひ、俗を惡みしさま、最、よく鎌倉時代の、文學の一特點を代表したり。但、長明の文い、この時代の影響を蒙れるのみならず、自家一已の心やすからず、世とも人をも、怨み憤れる所、おのづからあらいれたるい、之を激せしめたることのあればなりかし

明治二十五年十一月天長節の日　　標註者しるす

行く川のながれは云々川の水は絶えまなく流るゝいもと見し水におちずとなり此の句は論語子罕篇の子在川上曰逝者如斯不舍晝夜などの語より來たれるなるべし　よどみ　水流の遲滯してあつまる所をいふ　うたかた　眼の和名鈔に沫雨をよめり水の上の泡のことなり清輔の奥義抄にも水の上につぼのやうに浮きたる泡なりとありすべて物のはかなきを譬へていふ語なり　かつきえ云々かつは此の事をしながら彼の事にも渉り彼の物のあるに此の物のまじる意に用ふればこゝは結びつゝ消えなど云はんが如し　玉しき　屋造りの美麗なるをほめていふ金殿玉樓などいはんが如し　甍　釋名に屋背曰甍とあり又圓機活法に屋棟所以乘瓦とあり

訂正標註

方丈記

今泉定介校閲

上田胤比古標註

行く川のながれは、絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつきえ、かつむすびて、ひさしくとどまる事なし。世の中にある人と、すみかと、又かくのごし。玉しきの都のうちに、むねを、ならべ、いらかをあらそへる、たかきいやしき人のすまひは、代々をへて、つきせぬものなれど、是をまことかとたづぬれば、昔有りし家はまれなり。あるい、大家ほろびて、小家となる。すむ人も是によおなじ。とおろもか

昔ありし家は云〻　貴三品文時の詩に、桃李不レ言春幾暮、煙霞無レ迹昔誰栖などあるに附合せり

水の泡にぞ似たりける　上のよどみに浮ぶうたかたは云々と相應ず

ゑらず生れ死ぬる人云〻　心地觀經に有情輪廻生二六道一猶如二車輪一云〻などある意なり〻この方へ去るかを知らずとやうに下に廻して見るべし

かりのやどり　逆旅また寄寓などの字をよむ旅宿の意なり

其のあるゝと云〻　前段に人事の死生を擧げこの段に浮世の無常をいふ

無常　釋氏要覽に生滅輪廻謂二之無常一とあり常住不滅ならざることをいふ

露おちて花殘れり　露を主に朝顏の花を住家にたとへたり主は死ぬとも住家の殘るありされど殘れる家も久しく存せず或は住家まづ滅びて主の生き殘るもあれどそれはたやがて失せなんものをとなり

物の心を知れりしより　此の記は建暦二年作者七十歳ばかりの筆と見えたりされば〻こゝは二十歳位の比とさゝれたるなり

たびゝになりぬ　天變地異の續下に記されたるが如し但保元平治治承元暦の間兵乱屢ありしかど其のよし

はらぎ、人もおほかれど、いまゝへ見し人は、二三十人が中よ、ひづかにひとをふ多りなり。あしたに死ぬ、夕ようまるゝならひ、たゞ水の泡ゝぞにたりける。しらず、うまれしぬる人、何方よりきたりて、いづかたへか去る。又しらぎ、かりのやどり、誰が爲よ心と惱まし、何によりてか、目をよろこばしむる。其のあるゝとすゝかと、無常をあらそひ去る樣、いはゞ朝ゲほれ露にとならず。あるは、露落ちて、花殘れり。殘るといへども、朝日にかれぬ。或は、はなはしぼみて、露なほきえず。消えずといへども、夕をまつとなし。」凡、物の心をしれりより。四十あまりの春秋を送れるわひだゝ、世の不思議を見る事、やゝたびゝゝなりぬ。去ぬる安元三

聊もいはれざるは作者の意自然の變災をいふにありて世の盛衰興亡をいふが主にあらざればなり

安元三年　紀元千八百三十七年高倉院の御代なりこの年八月治承と改元ありき

四月廿八日　この火災の事平家物語一の卷源平盛衰記四十卷にも見えたり

戌の時　盛衰記には亥の刻と見えたり

たつみ　東南の隅なり巽の字を用ふ

いぬゐ　西北の隅なり乾の字を用ふ

朱雀門　拾芥抄に皇城の南門なりと見えたり

大極殿　拾芥抄云朝堂院正殿名二八省院一又謂二之最大殿一天子臨朝即位諸司告レ朝所云々

大學寮　拾芥抄に二條朱雀大路の東神泉苑の西とあり

民部省　拾芥抄云宮城内大政官南美福大路西職原抄云邦國土地之圖、戸口人民之數、此官之所レ知也

樋口　五條の下の小路なり富小路は壬生の東西にありこゝは東の方なるべし

病人をやどせるより云〻　盛衰記には小松重盛の侍成田といふもの山門の神輿に矢を射たる科よりて伊賀

年四月廿八日かとよ。風はげしく吹きて、しづかならざりし夜、戌のときばかり都のたつみより、火出で來たりて、いぬゐに到る。はてには、朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて、一夜が程に塵灰となりにき。火本は、樋口富小路とかや。病人をやどせるかり屋より、出で來けるとなむ。吹きまよふ風に、とゞく移り行くほどに。あふぎをひろげたるがごく、すゑひろになりぬ。とほき家は、煙よむせび、ちかきあたりは、一向ほのほと地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光よ映じて、あまねく紅なる中に、風に堪へず、吹ききられたる炎とぶがごとくにして、一二町を越えつゝ移り行く、其の中の人、うつゝこゝろあらんや。あ

の國へ流罪究まりこの夜富小路に止宿せしが同僚等送別のために酒宴を設けしより事出できぬと記せり平家物語にはこの源因見えず

風に堪へず　風にこらへずの意なり

うつゝ心　万葉集には現心をよめり

七珍萬寶　般若論に寶有二一百二十種一玉寶七種云々とあり七種とハ金、銀、琉璃、車渠、瑪瑙、珊瑚、琥珀なり

灰燼　說文に灰死火餘燼也左傳の註に燼火之餘末也とありもえくひの事なり

公卿　攝政關白太政大臣左右大臣内大臣を公といひ參議三位以上を卿といふすべて公卿とは三位以上の事なり之を月卿ともいふ四位以下を雲客といふ

邊際　カギリといふに同じ

さしもあやふき　しは助辞然も危きの心なりいはゆる常住ならぬ意なり

あちきなく　味氣なしの意俗にオモシロミナシ又無益などいはんが如し

治承四年　高倉天皇の御代なり但この旋風の事平家物語卷の四には治承三年五月十二日の午の刻ばかりとあり

辻風　つむじ風なり飈の字また旋風ともかく

るひは、煙よむせびてたふれふし。或は、炎よまくれて、たちまちに死よぬ。あるひは、又わづかよ身一つ、からくして、のがれたれども、資財をとり出づるに及ばず。七珍萬寶、さながら、灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。此のたび公卿の家十六燒けたり。まして、其の外は、かずしらず。すべて、都の中、三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者、數千人。馬牛の類、邊際をしらず。人のいとなみ、みな愚なる中に、さしもあやふき京中の家を作るとて、寶を費やし、心を惱ます事は、すぐれてあぢきなくぞ侍るべき。」又、治承四年卯月廿九日の比、中の御門京極の程より、大なる辻風おこりて、六條わたりまで、いかめしくふきける事侍りき。三四町

檜皮葺　檜の木をうすく削りてふける屋根の板なり

ごよむ　八雲御抄に響くなりと見えたり

地獄　大地婆々論云地底也下也謂二万物之中最在二底下一也獄局也謂二拘局不可得二自在一也

業風　劫風なり天の三災さて世界の滅却する時火災水災の上に毘風といふ大風吹きて色界天まで吹き破ることあり之を風災といふ業風もやがてこの事なり

をかけて吹きまくる間に、其の中に籠れる家ども、大なるもちいさきも、一つとして、やぶれざるはなし。さながら、ひらはたふれたるもあり。けたはしらばかり殘れるもあり。又、門のうへを吹きはなちて、四五町が程におき、又、垣をふけばらひて、隣とひとつになせり。いはむや、家のうちのたから、かずをつくして、空にあがり、檜皮おき板の類、冬の木の葉の、風に乱るゝがごとし。塵を煙のごとく吹きたてたれば、すべて、目も見えず。おびたゞしくなりぞよむ音に、ものいふ聲もきこえず。地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。家の損亡せるのみならず。是ととりつくろふ間に、身をそこなひて、かたわつけるもの數を

ものゝさとゝ　恠異なり　兆なり　何事かの前兆ならんとなり

おなじ年　治承四年六月二日太政入道清盛のはからひにて遷都ありしなり。この事平家物語五の卷盛衰記十七の卷に詳なり

此の京の始　桓武天皇の延暦十三年十月今の京へ遷都し給ひぬこの時葛野郡を右京とし長安城といひ愛宕郡を左京とし洛陽といひき平安城これなり

嵯峨天皇　桓武第二の御子さて平安遷都の事は桓武天皇の御世なる事更に論なし然るをこゝに嵯峨天皇の御時とあるは宮城落成の時をいへるにや」

既に數百歳　延暦十三年より是の歳治承四年まで帝王は三十二代星霜は三百八十餘歳と平家物語に見えたり

影をたのむ　荀子に木成レ陰而衆鳥息矣といふ語あり

時を失ひ　時に遇はずして衰へたるをいふ

淀川　山城にあり

馬鞍をのみおもくす　武士の所作とまれぶなり

西南海　西海道と南海道となり

東北國　東海東山北陸道などなり

莊園　貴人の私有地なり東北の國を好まぬは新都に遠くなりて便利あしげればなり

今の京　攝津八部郡福原の京なり世にいふ兵庫の築嶋これなり

條里　拾芥抄云條起レ從レ北行二於南一里起レ從レ西行二於東一三十六町爲二一里一六里爲レ條云〻都城市區のわりかたなり

しらず。此の風ひつおさるの方にうつり行きて、おほくの人の歎をなせり。辻風は、つねは吹くものなれど、かゝる事やはある。たゞごとにあらぎ。さるべきものゝさとしかなとぞうたがひ侍りし。」又、おなじ年の水無月の比、にはかに都遷り侍りき。いと思ひの外なりし事なり。大ゞた、此の京の始をきけば、嵯峨天皇の御時、都をさだまりにけるより後、すでに數百歳をへたり。ことなる故なくて、たやすく、あらたまるべくもあらねば、是を世の人、たやすからず愁へあへる樣、おとゝしにも過ぎたり。されど、とかくいふかひなくて、御門より始めたてまつりて、大臣、公卿、悉く、攝津の國、難波の京に移り給ひぬ。世まつかふる程の人、誰かひとり、古郷に殘り居らむ。官位におもひとかけ、主君の影をたのむ程の人は、一日ありとも、とく移らんとはげみあへり。ときをうしなひ、世にあまされて、期する所なき者は、うれへながらとまり居たり。軒をあらそひし人のすまひ、日と經つゝ、荒れ行く、家はこぼたれて、淀川うかび、地は目のまへは畠となる。人の心、皆あらたまりて、たゞ馬鞍をのゝおもくす。牛車を用とする人なし。西南海の所領とのみねがひ、東北國の莊園とは好まず。」其の時おのづから事のたより ありて、攝津の國、今の京に到れり。所のありさまを見るに、其の地程せばくて、條里をわるにたらず。北は山に傍ひてたかく、南は海に近くて下れり。波の音

木の丸殿　黒木の御所ともいふ柱をも削らず丸木のまゝにて建てたる御所なり筑前の國上座郡朝倉山にありといふこれは齊明天皇新羅百濟の兵亂につき筑紫へ幸し給ひ刈萱の關を置かれ往來の非常を改められし行宮の名なりさいひ傳ふ

浮雲のおもひ　安堵せざるをいふ

衣冠　束帶といふ公家の正服なり

布衣　狩衣のたゞひなり

直垂　堂上家の着するは絹地下の着するは布なり但直垂はもと武家よりおこれりといふ

てぶり　樣子なり風俗をいふ万葉集に天ざかるひなに五とせすまひして都のてぶりわすらえにけりなどあり

瑞相　支那にては奇瑞正瑞など皆吉事の兆に用ふれども我が國にては善惡共に用ひたり

つねにかまびすしくて、塵風をにはげしく、内裏は、山の中なれば、かの木の丸殿も、かくやと、なか〳〵やうかはりて、優なるかたも侍りき。日〳〵にこぼちて、川もせきあへず、はこびくだす家は、いづくに作れるにかあらん。猶、むなしき地は多く、造れる屋はすくなき。古郷は、既にあれて、新都はいまだならず。ありとしある人、みな、浮雲のおもひをなせり。本より此の所よ居たる者は、地をうしなひて愁へ、今うつり住む人は、土木の煩ある事を歎く。道の邊をみれば、車にのるべきは、馬よのり、衣冠布衣なるべきは、直垂をきたり。都のてぶりたちまちにあらたまりて、たゞひなびたる武士にてならず。是は世の乱るる瑞相とか、聞

しろく　掲焉又炳然などの字を訓めり

民の愁空しからず　民の愁へおもふ志空しからず遂に入道の心もなほりきとなり

かしこき御　仁德天皇を申せるなるべし唐土にも堯舜の時には茅茨きらずして屋をふきたりきといふ

今の世の中云々　古今の優劣を知るべしとなり

養和　安德天皇の御代なり治承四年七月十四日養和と改元せり

きおけるもしるく、日を經つゝ、世の中うき立ちて、人のこゝろもをさまらず。民の愁つひにむなしからざりければ、同年の冬、なほ、此の京にかへり給ひぬ。されど、こぼちたせりし家どもは、いかになりまけるぞか、悉く、もとのやうにもつくらず。ほのかに傳へ聞くは、いにしへのかしこき御代には、憐みをもて、國を治めたまふ、則、御殿は茅をふきて、軒をだにもとゝのへず。煙のとぼしきを見たまふときは、かぎりあるみつき物をさへゆるされき。是民を惠み、世をたすけ給ふよりてなり。今の世の中のありさま、むかしにおぼらへて知りぬべし。」又、養和の比かとよ、久しくなりて、たしかは覺えず。」一年が間、飢渴して、淺ましし

ぞめき　俗にゾヨメクといふ詞にて騒くこゝろなり
堺をいで　租税を逃れんがために浮浪人となるなり
山に住む　食物乏しきがために山に住みて木實を拾ひ草根を掘りて命をつぐとの義なり
なべてならぬ　一通りならぬの義なり

みさを　本心を守り義理を失はざるをいふ
念じわび　堪へがぬるをいふ
粟　米粟の意にて五穀の總稱なり

き事侍りき。或い、春夏日でり、或は、秋冬、大風、大水など、よからぬ事ども打ちつゞきて、五穀ことゝくみのらぎ。空しく春耕し、夏うるいとなみのみわりて、秋刈り冬收むるぞめきはなし。是によりて國々の民、或い、地をすてゝ、堺を出で、或い、家を忘れて、山に住む。さまゝの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、さらに其のしるしなし。京のならひ、なによわざにつけても、みなもとは、田舍をこそたのめるに、絶えてのぼるものなければ、さのみやい、みさをも作りあへん。念ぜ佗びつゝ、寶物かたはしより捨つるがごとくすれども、更に目みたつる人もなし。たまゝ、かふるものい、金を輕くし、粟を重くぜ。乞

えやみ　疫病なり
まさるやうに去年よりもまさるやうにてさまゝの祈をも行はれしかど更にその効なしとなり
少水の魚　或經曰是日已過命則衰滅如少水魚斯有何樂云々

ついひぢ　土にて築きたる塀なり又築墻ともいふ
世界　楞嚴經四の卷に世爲遷流界爲方位汝今當知東西南北四維上下爲界過去現在未來爲世とあり四方上下の界あるよりいへば世界なり隔て分れたる間差よりいへば世間なり

食道のべよ多く、愁へ悲しぶ聲、耳よみてり。先の年かくのごとく、からくして暮れぬ。明くる年は、たちなほるべきかと思ふに。あまさへ、えやみ打ちそひて、まさるやうに跡かたなし。世の人、みな飢ゑ死にければ、日とゝつゝ、きはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには、笠うちき、足ひきつゝみ、よろしき姿したる者、ひたすら家ごとに乞ひありく、かくわびしれたる者ども、ありくかとみれば、則、たふれ死ぬ。ついひぢのつら、路頭に飢ゑ死ぬる類は、かずしらず。とり捨つるわざもなければ、くさき香、世界よみちゝて、かはり行くかたちありさま、目もあてられぬ事ねほかり。いはむや、川原などは、馬車の行きち

力つきて云々　柚人の木こり荷ふ力もつきたれば都には薪まで乏しくなりきとなり

丹つき　丹は赤き色の繪の具なり

濁悪　觀無量壽經疏云濁者五濁也一見二煩惱三衆生四命五劫惡者十惡也殺、盜、婬、妄語、惡口、両舌、綺語、貪、瞋、邪見也云々要するに人心の濁りゆく世をいふ

がふみちだにもおし。あやしき、しづ山がつも、力つきて、薪よさへともしくなりゆけば、たのむかたなき人は、みづから家をこぼちて、市に出でてうるに、一人ゞ持ち出でぬるあたひ、猶、一日が命を、さゝふるにだに及ばずとぞ。あやしき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白ゞねこがねのはくなど、所〻につきてみゆる木のされあひまじれり。是を尋ぬれば、すべき方なきものゝ、古寺に致りて、佛をぬすみ、堂の物の具をやぶり取りて、さりくだけるなりけり。濁悪の世にも生れあひて、かゝる心うきわざをなん見侍りし。又いとわはれなる事も侍りき。さりがたき女男など、持たる者は、其の心ざしまさりて、ふかきは、かならずさ

我が身をばつきになし　拾遺集右近の歌に「わすらるゝ身をば思はずちかひてし人の命のをしくもあるかな」などあるに同じ趣なり

仁和寺　山城の葛野郡にあり光孝天皇仁和年間に造立せられき

隆曉法印　源の俊隆の男にして彌勒寺法印とも號せり東鑑に頼朝の子が此の法印の弟子となりたるよし見えたり

ひじり　聖の字を訓ぜり高僧の畧なり

阿字　阿彌陀佛の阿の字をかきて引導すとなり

きたちて死にぬ。其の故は、我が身をば、次におして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふかたゝ、たゞ〳〵乞ひ得たる物を、まづゆづるによりてなり。されば父子ある者は、定まれる事にて、親ぞさき立ちて死にける。又母ゞ命盡きて、ふせるをもしらずして、いとけなき子の、その乳房にすひつきつゝ、ふせるなども有りけり。」仁和寺に、隆曉法印といふ人、かくしつゝ、數しらず、しぬるをとかなしみて、ひぢりとあまたかたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿の字を書きて、緣を結ばしむるわざをなむせられける。其の人數をしらんとて、四五兩月ゞほど、かぞへたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱

川原　山城の愛宕郡東河原なり
白川　これも愛宕郡なり
西の京　前に記せる長安城右京の地なり川原白河といふにて東の方の地をあかせり東西おしなべての義なり
七道　東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海なり
崇德院　鳥羽院第一の御子なり

元暦二年　後鳥羽院の御代なり東鑑四の卷に元暦二年七月九日午刻京都大地震云〻と見えたるこれなり
大なゐ　なゐは地震なり今も中國西國なまにてはかくいふ所もありといふ

雀より東、道のほとりにある頭、すべて四万二千三百餘なん有りける。況、其の前後に死ぬるものも多く、川原、白川、西の京、もろ〳〵の邊地などをくゝへて いはば、際限も有るべからぬ。いかに いはむや、諸國七道をや。近くは、崇德院の御位の時、長承の比かよ、かゝるためしはありけると聞けど、その世のありさまはしらず。まのあたり、いとめづらかに悲しかりし事なり。」又、元暦二年の比、大なゐふる事侍りき。其の様つねならず。山はくづれて、川をうづみ、海はかたぶきて、陸とひたせり。土さけて、水ときあがり、いはほわれて、谷にまろび入り、渚こぐ船は、波にたゞよひ、道行く駒は、足のたちどをまどはせり。いはんや、都の

塔廟　塔婆は梵語なり支提と譯す舍利を安置して恭敬する處なり廟は宗廟とて先祖を祭る處なり

羽なければ　莊子人間世云聞二以有一翼飛者一未聞二以無一翼飛者一云〻
龍ならねば　史記老子列傳云孔子曰至二於龍一吾未一能一知其乘二風雲一而上一天云々

ほとりには、在々、所々、堂、舍、塔、廟ひとつとして、全からず。或はくづれ、或はたふれたる間塵灰立ち上りて、盛なる煙のごとし。地の震ひ、家のやぶるゝ音、いかづちまこ、ことならず。家の中にをれば、忽に打ちひしげなんとす。はしり出づれば、又、地さけさく。羽なければ、空へもあがるべからず。龍ならねば、雲にのぼらん事難し。おそれの中に恐るべかりけるは、只、地震なりけりとぞ覺え侍りし。その中に、ある武士の、ひとり子の、六七ばかりに侍りしが、つゐひぢのおほひの下に、小家を作りて、はかなげなる跡なし事をしてあそび侍りしが、俄にくづれうめられて、あとかたなく、ひらに打ちひさがれて、二つの目など、一寸ばかりう

子のかなしみ　後撰集雑輔の歌に「人のおやの心はやみにあられぬも子を思ふ道にまよひぬるかな」などあるを思ふべし

餘波　もと大風の後に風なくして波の立つをいふ語なれど轉じては殘る其の事の過ぎ去れる後にその氣のこれるをいふ

四大種　地水火風をいふ、毘婆々論云大而是種故名二大種一能減能增能損能益是爲二種義一躰相形量遍二諸方域一能成二大事一是爲二大義一云々

齊衡　文德天皇の御代なり

東大寺　南都七寺の一なり聖武天皇の創立し給ひし寺なり

ち出だされたるを、父母かゝへて、聲もをしまず、悲しみあひて侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしか。子のかなしみには、たけきものも、恥をわすれけりと覺えて、いとをしくことさりかなとぞ見侍りし。かくおびたゞしくふる事は、しばしにてやみにしが、其の餘波、しば〳〵絶えず、よのつねに驚くほどの地震、二三十度、ふらぬ日はなし。十日、廿日過ぎにしかば、やう〳〵間どほになりて、或は、四五度、二三度、もしくは、一日まぜ、二三日に一度など、大かた其の名殘、三月ばかりや侍りけん。四大種のうちに、水火風は、つねに害をなせど、大地に至りては、殊なる變をなさぬ。むしろ、齊衡の比かとよ、大地震ふりて、東大寺の佛の

みくし落ち　文德實錄によるに齊衡二年五月廿三日のことなり尚この後聖三年の春に至るまで數度の地震ありしよしなり

すべて世のありにくき事云々　安元の火災より元暦の地震まで世上の轉變を擧げて人界の艱苦を知らしめ我が身とすみ家との二つに結び更に身心を修むべき要道を說きおこさんとす老練の筆といふべし

權門　國家の政務をつかさどりて勢力ある家をいふ

聲をあげて云々　本朝文粹十二の卷慶滋保胤池亭記に近二勢家一容二微身一者有レ樂不レ能二大開一口而咲一有レ哀不レ能高揚一聲而哭一進退有レ慮心神不レ安暫猶二鳥雀近一驚鷗一矣とありよく。こゝの文を似たり

みくし、落などして、いみじき事ども侍りけれど、猶、此のたびにはしかずとぞ、則、人みなあぢきなき事を述べて、いさゝか、こゝろのにごりもうすらくかと見し程に、月日ふさぬり、年越えしかば、後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし。すべて、世のありにくき事、我が身と、すみかとの、はかなくあだなるさま、かくのごとし。いはむや、所により、身のほどにしたがひて、心をなやます事、あげてかぞふべからず。もし、おのづから、身叶はずして、權門のかたはらに居る者は、ふかくよろこぶ事はあれども、大に樂しぶにあたはず。歎ある時も、聲をあげて、泣く事あり。進退やすからぬ、立居につけて、恐れをのゝく。たとへば、

すぼき姿　俗にミスボラシキ姿といふに同じ

炎上　炎燒の義なり

邊地　片田舍をいふ

人をはぐくめば　莊子曰、有人者累見有於人者憂

雀の鷹の巣に近づけるかごとし。もし、まづおくして富める家の隣にとるものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつゝ、出で入る、妻子僮僕のうらやめるさまを見るにも、富める家の人の、ないがしろなるけしきと聞くにも、心念々にうできて、ときとしてやすからず。もし、せばき地に居れば、近く炎上する時、其の害をのがるゝ事なし。もし、邊地にあれば、往反わづらひおほく、盜賊の難はなれがたし。いきほひあるものは、貪欲ふかく、ひとり身なるものは、人にかるしめらる。寶あればそれ多く。貧しければ、なげき切なり。人をさのめば、身、他のやつことなり。人をはぐくめば、心、恩愛につかれる。世にしたがへば、身くるし。又し

たまゆら　たゞしといはんが如し

祖母の家　長明は父祖累世鴨の祢宜なり家を傳へてとは姓氏を嗣げるまはあらでたゞ宅地を傳へ領せしどの事なるべし祖母の傳記詳ならずあるぶに二代后多子の女房なりしならんといへり

絲かけ　長明社務職を望みたるに叶はずして退隱したるなればこゝはその事をさせるなるべし

しのぶかたゝ　金葉集雜部に家を人まはなちてたゝとて柱に書きつけ待りける周防内侍「住みわびて我さへのきのたまのぶくさたまのぶかたゝしけき宿かな」とあり

三十餘、高倉院の晩年安元治承の比なり

はかゝし　はかさるなどのはかを重れたるなればハキハキする事をいふなりこゝはシツカリなどの意に見てよろし

車やどり　門内の側與車などをさむる處をいふ

川原　鴨の川原をいふ

たかはねは、狂へるに似たり。いづれのところをしめ、いかなるわざをしてか、しばしも、此の身をやどし、たまゆらも、心を慰むべき。」わが身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所にすむ。其の後、緣かけ、身おとろへて、忍ぶかたゝしげふりしかば、つひに、跡とむる事を得ずして、三十餘にして、更に我が心と、一つの菴を結ぶ。是をありしすまひになずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりをかまへて、はかゝしくは、屋を作るに及ばず。わづかに、ついひぢをつけりといへども、門たつるにたつきなし。竹と柱として、車やどりとせり。雪ふり風ふく毎に、あやふからぬ所もあらず。所は川原ちかければ、水の難ふかく、

白波　後漢靈帝紀に黄巾郭泰などいふもの西河の白波谷に起これり之を白波賊といふと見えたりこれより盗賊を白波とはいふこゝは水の難とある緣語に盗賊を白波といひしならん又水災と盗賊とを兼れたりと見てもあるべし

念じすぐし　堪へ忍びて年を經たりとなり

三十餘年　廿餘ばかりより五十餘までをさせり前に物の心を知れしよりとある首尾なり

折々のたがひめ　四時の代謝と前にあげたる世の轉變とを兼れている

五十の春　後鳥羽院の建久のころほひなり

よすが　緣なり

執　物にはなれがたき忘念をいふ執念執著などのしふなり

春秋なかへぬる　物換り星移るなどの意なり

六十の露　土御門院の建永の比なり

末葉のやどり　露命傾きて消えなんとするにたとへていふ

百分が一　前の十分が一とあるを受けていへり

白浪の恐もさわがし。すべて、あらぬ世を念ぜ過ぐしつゝ、心をなやませる事は、三十餘年なり。其の間、折々のたがひめに、おのづからみおかき運をさとりぬ。すないち、五十の春を迎へて、家を出で、世をそむけり。もとより、妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらぜ、何に付けてか、執をとゞめん。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をかへぬる。爰に、六十の露きえがたにおよびて、更ま、末葉のやどりをむすべるとあり。いはゞ、狩人の一夜の宿を作り、老いたるかひこの、まゆをいとなむがごし。是と中比のすみかになずらふれば、又、百分が一にだにも及ばぜ。とかくいふ程に、齡は、とし〳〵にかたふき、

所を思ひ定めざる　本より隱遁の身にして一所不住の本意なればなり

うちおほひ　屋根なり

かけがれ　和名抄に鉤匙とあるこれなり

二兩　兩は輛なり毛詩巢鵲註に一車兩輪故謂之兩とあり

むくやる外　唯車力の料を報ずるまでの事よとなり

日野山　山城宇治郡木幡山の東北にあり

日がくし　日隱の笹庇の事なり

すのこ　簀子をよめり竹樣なり

閼伽棚　あかは清水の梵語なり佛に供すべき水又は香水などをあげおく棚をいふ

阿彌陀　梵語なり無量壽覺と譯す極樂淨刹の教主なりといふ

落日をうけて　釋迦章提夫人に說き

すみかは、折々にせばし。其の家のありさまよのつねならず。ひろさは、ひつかに方丈、たかさは七尺ばかりなり。所を思ひ定めざるゞ故に、地をしめて作らず。土居をくみ、打ちわたしてふきて、つぎめごとに、かけがねをかけたり。もし、心に叶はぬ事あらば、やすく、外に移さむがためなり。其の改め造る時、いくばくの煩かある。つむ所わづかに二両なり。車の力をむくゆる外は、更に用途いらず。」いま、日野山の奥に跡をかくして、南にかりのひがくしとさし出だして、竹のすのこをしき、其の西に閼伽棚を作り、中には、西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を請けて、眉間の光とす。彼の帳のとびらに、普賢ならひに、不

て十六の觀念と示し淨土の因をなさしめし事觀經に見えたり其の第一に日觀あり
往生要集　惡心院の僧都源信念佛の業を本として經論の中の要文をあつめたる書なり宋へも渡りし書なりといふ

ほとろ　蕨の穗のたけたるをいふ
つかなみ　藥をあみて作れる敷物なり但一本に「つかなみをしき」の七字なし
ふつくゑ　和名抄に書案とあるこれなり
すびつ　今の圍爐裏なり
ひめ垣　袖垣などもいひて短く小き垣なり

藥草を植ゑ　自まもり又人を濟はんがためなり
かけひ　筧の字をよめり竹をわたして水を通はすものなり
爪木　折りあつむる柴といふ

動の像をかけたり。北の障子の上に、ちいさきたなをかまへて、くろき皮籠三四合を置く、すなはち、和歌、管絃、往生要集などきの抄物をいれたり。傍に、こと、琵琶おの〳〵一張をたつ。いはゆる、をりごと、つぎ琵琶これなり。東にそへて、さらひのほどろをしき。つかなみを敷きて、夜の床とす。東の垣に窓をあけて、爰にふつくゑと作り出だせり。枕のかたに、すびつあり、是を柴折りくぶるよすがとす。菴の北に少地をしめ、あばちなるひめ垣をかこひて園とす。則、もろ〳〵の藥草を栽ゑたり。かりのいほりのありさま、ゝくのごとし。其の所のさまをいはゞ、みなみにかけひあり。岩をたゝみて、水をためたり。林の沢近ければ、爪木をひろふ

外山　日野山の邊今も外山といひて長明が方丈の遺趾といふ處ありとぞ
正木のかつら　正木は借字なり眞榮えの葛の義なり
跡を埋めり　さひ來る人もなきさまといふ
觀念のたより　佛の悟の心を深く念ずるを觀念といふ
藤波　藤花の波に似たるよりいふとぞ

口業　十惡の中口を以てなす罪業なりいはゆる妄言綺語などの戒を破る事なしとなり
境界　眼、耳、鼻、舌、心、意、色、聲、香、味、觸、法の類、六根、六識、六塵なはせて十八境界といふとぞ

にともしゝらず。名を外山といふ。正木のかづら、跡を埋めり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらぎ。春は、藤波を見る、紫雲のごとくして、西の方に匂ふ。夏は、時鳥を聞く、かさらふごとに、しでの山路をちぎる。秋は、日ぐらしの聲、耳にみてり。空蟬の世をかなしむかときこゆ。冬は、雪を憐な、つもりきゆるさま、罪障にたとへつべし。もし、念佛ものうく、讀經まめならざる時は。みづからやすみ、みづからおこたるに、さまたぐる人もなく、又、恥づべき友もなし。殊更に、無言をせざれども、ひとりをれば、口業をさめつべし。かならず、禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何に付けてかやぶらん。も

岡の屋　大幡宇治川の東岸にあり
滿沙彌　養老年間の人なり俗名を笠朝臣麻呂といひきこゝは滿沙彌の歌に「花の中を何にたとへん朝ぼらけこぎゆく舟のあとの白ら波」とあるによりてかけり文の意は我が身のはかなき事しら波の如しと思ひよせたる時にはとなり
潯陽の江　唐の元和十年に白樂天の左遷せられし處なりこゝは琵琶行を思ひよせたるなり
源都督　桂中納言經信卿の事なり此の人嘉保元年の六月太宰權帥に貶せられき琵琶の妙手たりしかばこの流を桂流といふ都督は太宰帥の唐名なり
あまりの興　餘興なり
秋風の樂　盤涉調の曲名なりこの曲は弘仁天皇の御代に始まれりといふ流泉の曲　琵琶の秘曲に流泉啄木といふあり仁明天皇の御代藤部頭真敏といふ人入唐して傳授せりとぞ

し、跡のしら浪に、身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし、桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もし、あまりの興あれば、しば〳〵松のひゞきに、秋風の樂をたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。藝は、是つたなければ、人の耳を悅ばしめんとにもあらず。ひとりしらべ、獨、詠じて、みづから心をやしなふばかりなり。」又、麓に一の柴の庵あり。卽、此の山守が居るところなり。かしこに小童あり。時々來て、相訪ふ。もし、つれ〳〵なる時は、是を友としてあそびありく。かれは十六歳、われはむそぢ、其の齡、事乃外なれど、心を慰むる事は、これ同じ。或は、

すそわ　わは万葉に回の字をかけり
山麓の邊をいふ
ほくみ　稻の穗を組みあはせて作るものにて穗掛ともいふ
木幡山　宇治郡高が嶽の北にあり土俗は關山といふ木幡の關の迹なりとぞ
伏見里　紀伊郡なり鳥羽も同郡なり
羽束師　乙訓郡なり土俗は耻しらずの森といふとぞ
勝地は云〻　白氏文集十三に勝地本來無二定主一大都山屬二愛山人一とあり
すみ山　宇治の御室戸山の東北にあたれり
笠取　宇治の醍醐山の東にあたれり
岩間　近江の志賀郡なり石山も粟津の原も同郡なり
田上川　近江の栗太郡にして宇治の川上なり

窓の月に云々　故事あるゝや詳なら

つ花をぬき、岩なしをとる。又、ぬかこをもり、芹をつむ。或は、すそわの田井に到りて、落穗をひろひて、はぐみをつくる。もし日うららかなれば、嶺によぢ上りて、はるかに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地に、主なければ、こゝろを慰むるに障なし。あゆみ煩なく、志、遠く到るとぞ。是より峯つゞき、すみ山を越ゆ、笠取を過ぎて、或は、岩間にまうで、或は石山ををがむ。もしは又、粟津の原と分けて。蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸太夫が墓を尋ぬ。歸るさまに、折につけつゝ、櫻をかり、紅葉をもとめ、蕨を折り、木のみをひろひて、且は佛に奉り、且は家づとにす。もし、夜しづゝなれば、窓

す　槇木鳴　久世郡にて宇治川の西にあたれり

ほろ〳〵と鳴く　玉葉集に行基菩薩の歌とて「山鳥のほろ〳〵となく聲きけば父かとぞおもふ母かとぞ思ふ」とあり

かせぎ　鹿の事なり

寐覺の友　堀川院百首に國信の歌とて「いふ事もなき埋火をおこすかな冬のれざめの友しなれば」とあり

白地　かりそめの意なり

の月に、古人としのび、猿の聲に、袖をうるほす。草むらの螢は、遠く槇木の島のかゞり火にまがひ、曉の雨は、おのづから、木の葉ふく嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きて、父か母かと疑ひ、峯のかせぎの近く馴れたるにつけても、世にとほざかる程をしる。或は、埋火をかきおこして、老の寐覺の友とす。ねそろしき山おろねど、ふくろふの聲をあはれむにつけても、山中の景色折につけて、盡くる事なし。いはむや、ふかく思ひ、深くしれらん人のためは、是にしもかぎるべからず。大ゞた此のところに住み初めし時は、白地とおもひしゝど、今までに五とせを經たり。假の菴もやゝふる屋となりて、軒にはくち葉ふかく、土居に苔むせ

やむごとなき　已み難し打ち捨ておかれずの意より轉じて常なみならず貴しといふ義に用ふ

がうな　寄居蟲とかきて貝の類なり おのれ殼をもたず他のあきたる殼を求めて其の中に住するものとぞ枕草紙に日比ばがうなのやうに人の家にしりをさし入れてなんさぶらう云〻とあり

みさご　鶚の字をよめり鷲の類なり形鳶に似て水邊の山中に栖み魚を捕りて食とするものといふ

住家を作るならひ云〻　是より世間營作の仔細を述べたり

り。おのづから、事の便に、都を聞けば、此の山に、籠りゐて後、やむごとなき人の、かくれ給へるも、あまたきてゆ。まして、其の數ならぬたくひ、盡くして、是をゐるべからず。たび〳〵の炎上に、ほろびたる家、又、いくそばくぞ。さゞかりの菴のみのどけくして、恐なし。程せばしといへども、夜ふす床あり。晝居る坐あり。一身をやどすは、不足なし。がうなは、ちいさき貝をこのむ。是よく身をしるによりてなり。みさごは、荒磯にゐる。則、人を恐るゝよりてなり。我又、かくのごとし。身をしり、世をゐれらば、願はず、まじらはず、只しづかなるを望とし、愁なきを樂とす。すべて、世の人の、住家と作るならひ、かならずしも、身の爲にはせず、

眷屬　字彙に眷は親屬なり顧念なりとあり
朋友　公羊傳に同門曰朋同志曰友とあり
糸竹　五經通義に絲爲絃竹爲管とあり
賞罰　罰は輕く見てあるべし

或は、妻子眷屬の爲につくり、或は、親昵朋友のために作る。或は、主君、師匠および財寶馬牛の爲にさへ、是を作る。我今、身の爲よむすべり。人のために作らず。故いかんとおれば、今の世のあらひ、此の身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべきやつこもなし。たとひ、ひろくつくれりとも、誰をかやどし、誰をかすまん。」それ、人の友たる者は、とめるをたふとみ、ねんごろなるとさきとす。かならずしも、情あると、すなほなるとをば愛せず。たゞ、糸竹花月と友とせんにいしかず。人の奴たる者は、賞罰のはなはだしきをかへりみ、恩のあつきをおもくす。更にはでくみあはれぶといへども、やすくしづかなるをばねがはず。

たゆからずしも　ゆるやかならざる意なり

唯、我が身とやつことするにはしかず。もし、すべき事あれば、すなはち、おのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人をしたがへ、人をかへり見るよりはやすし。もし、ありくべき事あれば、みづからわゆむ、苦しといへども、馬鞍牛車と、心をなやますには似ず。今、一身を分ちて、二の用をなす、手のやつこ、足の乘物、よく、我が心にかなへり。こゝろ又身のくるしみをしれゝば、くるしむ時はやすめつ。まめなる時はつかふ。つかふとても、たびたび過ぐさず。ものうしとても、心をうごかす事なし。いかゞ、いはんや、つねにありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいとづらに、やすみをらん。人を苦しめ、人を惱ますは、又、罪業

藤の衣　藤の皮葛などにて織りたる賤者の衣服なり
麻のふすま　ふすまは襖にて夜具をいふ

うたゝれ　假羅の字をよめり
生涯　在世一期の間をいふ
折々の美景云々　前に糸竹花月を友とせんにはあかじとある首尾なり

なり。いかゞ、他の力をかるべき。」衣食のたぐひ、又れなど。藤の衣、麻のふすま、うるにしたがひて、はだへをゝくし、野邊のつばな、峯のこのみ、命をつぐばかりなり。人にまゝはらざれば、姿と恥づる悔もなし、かてともしければ、おろそかなれども、あほ、味をあまくす。すべて、かやうの事、たのしく富める人に對していふにはあらず。たゞ我が身一つにとりて、昔と今とを、たくらぶるばかりなり。大かた、世を遁れ、身を捨てしより、うらみもなく、おそれもなし。命は、天運にまかせて。とゞまるまじ。まだたしとせじ。一期のたのしびは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望は、をり〳〵の美景に殘れ

三界　祖庭事苑に三界謂三欲界色界無色界一又謂三之三有一とあり
たゞ心一つ　華嚴經に三界唯一心、心外無二別法一心佛及衆生是三無二差別一とあるに同じ意なり

他の俗塵に云々　他人の俗塵に執着するを除ぶとなり
分野　下學集に分野をアリサマと訓せり

月影かたふき　我が身の年老いたるを月影の西山に傾きたるにたとへていふ
餘算　餘命なり殘生といふも同じ
三途の闇　死期到來の時をいふ四解脱經云地獄名二火途一餓鬼名二刀途一畜生名二血途一云々これを三途といふ

り。それ、三界は、たゞ心一つなり。心、もし、安らぎぬば、牛馬七珍も由なく、宮殿樓閣ものぞみなし。今さひしきすまひ、一間の菴、みづから是を愛す。おのづからみやこに出でて、乞食となれる事とはづといへども、かゝりてこゝに居るときは、他の俗塵に着する事をあはれぶ。もし、人此のいへるとを疑はゞ、魚鳥の分野と見よ魚は水にあかぬ。魚にあらざれば、其の心を知らず。鳥ハ林を願ふ。鳥にあらざれば、其の心を知らずとらん。そもそも、一期の月影かたぶきて、餘算、山の端に近し。忽に三途の闇に向はん時、何のわざをか、かごたんとする。佛の人を教へさとしたまふおもむきは、事にふ

草の庵と云々　方丈の庵を愛し靜閑の山居を願ふも畢竟障なりとなり

道を行はんため　佛道修行して解脫せんためとなり

ひとり　前に記せる如く持戒堅固の僧の通稱なり

にごりに染め　名利に染着するをいふ

淨名居士　天竺にて方丈の庵に住みし維摩詰の事なり

周梨槃特　周梨は小の義なり槃特は釋迦の弟子にて愚なるものなりきといふ

れて、執心なかれとなり。今、草の菴を愛するも、科とす。閑寂に着するも、障なるべし。いかゞ、用なき樂とのべて、むなしく、あたら時を過ぐさん。しづかなる曉、此のことわりをおもひつゞけて、みづから、こゝろにとひていはく、世をのがれて、山林にまじはるは、心ををさめて、道を行はんためなり。おかるゝ、汝が姿はひじりに似て、心はにごりにしめり。住家は、すなはち、淨名居士の跡とけがせりといへども、たゞもつところは、わづかに、周梨般特が、行にだにも及ばず。もし、是貧賤の報の、みづから惱ますか。はた又、妄心の至りて、くるはせるか。其の時、心更に答ふる事なし。たゞ、傍に舌根をやとひて、不請の念佛、両三反を申して止み

建暦の二とせ　順德院の御代なり

彌生　三月なり

桑門　文選にヨステピトと訓せり沙門の事なり

蓮胤　長明の法號なり

月影は　此の歌新勅撰釋教部に十二光佛の心をよみ侍りけるに不斷光佛をよめる源の季廣とあり季廣は木工權頭季兼の男にて下野守に任ぜられ後に清季といひき長明同時の人なればたゞ折からおもしろく思ひしまゝに記したるにやあらん又此の歌なき本もあるよしさらば後人の書き入れたるにもあらん今いづれとも定めがたし歌の意は月は四時かはらず照るものなれども猶山の端にかくるゝつらさあれば唯たえぬ光の佛を見るよしもあれかしと願ふべしとなり

ぬ。時に、建暦の二とせ、彌生の晦日比、桑門蓮胤、外山の菴にして、これをしるす

月かげは入る山の端もつらからき
たえぬひかりを見るよしもがな

訂正標註

方丈記終

明治廿五年十一月十五日印刷
明治廿五年十一月廿一日出版

版權所有

正價金八錢

標註者　東京市小石川區西江戸川町一番地　上田胤比古

發行者　東京市神田區西紺田町一番地　伊藤岩治郎

賣捌所　大阪市東區北久太郎町四丁目　柳原喜兵衛

印刷者　東京市京橋區弓町十三地　松本義保

深井鑑一郎
堀拾二郎校註
訂校 標註東萊博議 全三卷
壹冊正價金卅錢
郵稅金六錢宛

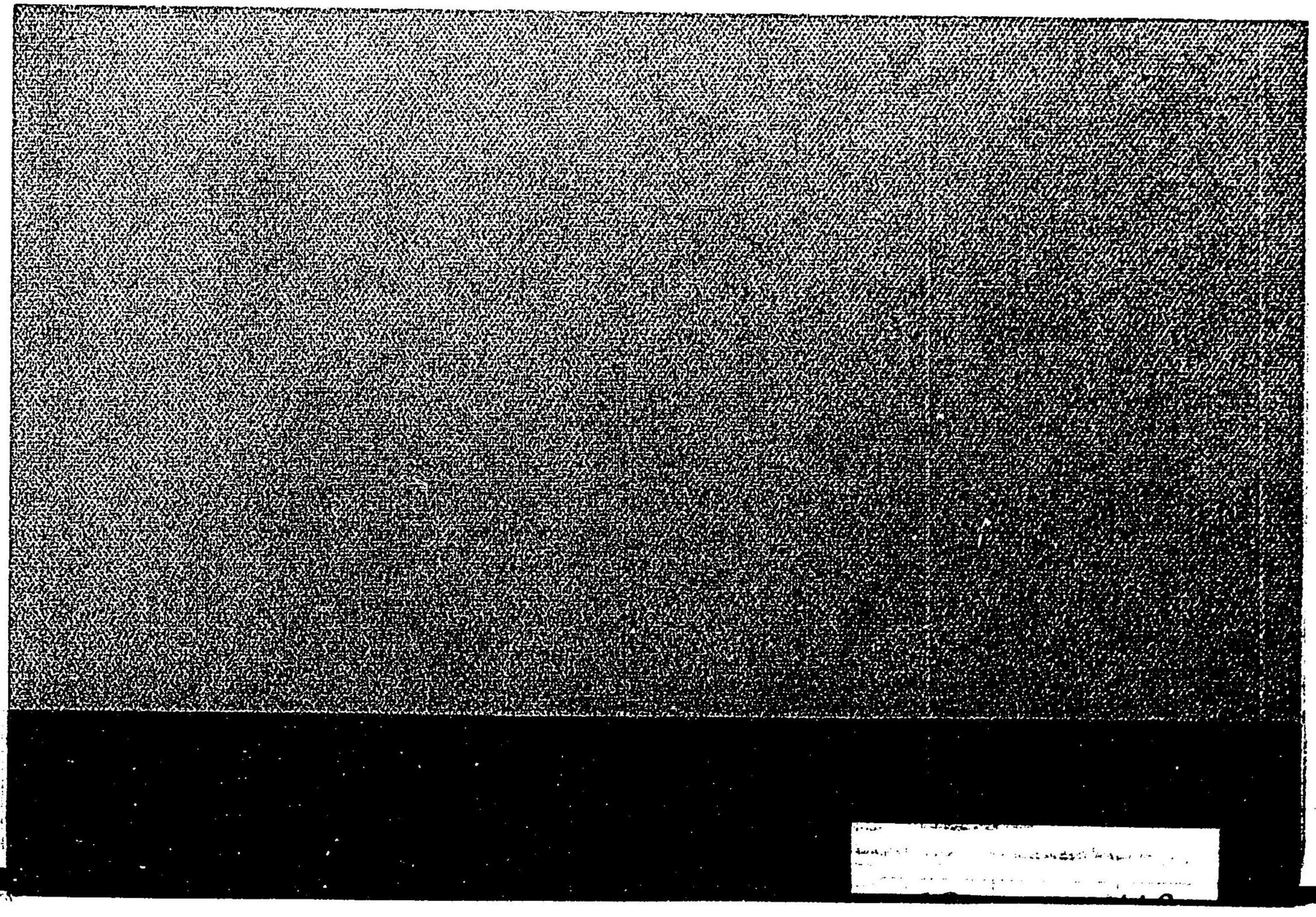
深井鑑一郎集註
標註 史記列傳讀本 全五卷
挿圖
首出項羽本記
壹冊正價金五錢
郵稅金四錢ッヽ

增田于信校註
訂校 標註つまぐ草 全九版
正價洋本金廿五錢
和本金卅五錢

增田于信校註
訂校 標註土佐日記 全三版
正價金拾錢

本居豐穎校閲
增田于信編
新編紫史 第四帙出版
一名通俗源氏物語
正價洋本金四十錢
壹帙和本金七十五錢

I-37-83



40
118
Ⓜ

訂正標註 方丈記

国立国会図書館

095847-000-7

40-118

訂正標註方丈記

上田 胤比古／注

M25

DBR-0057